イスラーム世界研究　第4巻1–2号（2011年3月）398–409頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 4-1&2 (March 2011), pp.398–409

各地域における「科学のイスラーム化」の議論と国際ネットワーク

井上　貴智*

1. はじめに

「科学のイスラーム化」にかかわる議論は、イスラーム世界のさまざまな地域でこれまで議論が発展してきた。またそれと同時に、それぞれの地域間が結びつきを見せる中で議論が展開してきた。本論では、このような地域での独自の発展と同時に、この議論が国際的なネットワークを通じて発展してきたとの仮説を踏まえながら、各地域の議論の発展を検討する。なお、「科学のイスラーム化」という語は、さまざまな文脈で多様に使用され、解釈されうる。科学をイスラーム法に照らし合わせるということも、中世のイスラーム科学の復興を目指すことも、「科学のイスラーム化」であるということができる。しかし、本論における「科学のイスラーム化」は、現代イスラーム諸国において西洋的な近代科学を何らかの形でイスラームのなかに内在化させようとする思想や運動と定義したい。

2. イスラーム世界と現代科学の受容

はじめに、各地域で「科学のイスラーム化」という議論が生まれてくる契機として、どのように各地域に現代科学が受容されていったかということを確認していく。ここでは、現代科学の受容と議論の発生の契機を各地域の近代的な大学教育の普及や、欧米への留学という観点に焦点を絞ってみていく。

まず中東の近代的な大学教育にかんしてみてみよう。中東で近代的な大学が始まったのは19世紀の後半から20世紀初頭である。たとえば、国立大学としてカイロ大学が1908年、ダマスカス大学が1923年に設立された。またキリスト教宣教団体の活動によって、ベイルート・アメリカン大学の母体が1866年、カイロ・アメリカン大学が1919年に設立された。レバノンでは、フランス系の宣教活動による大学設立もその時期に起こった。なお、このような近代的な大学は設立の母体が医学学校であることが多い[1)]。その後、中東諸国の多くは科学の担い手を十分に育成しきれなかったことから、欧米諸国へ積極的に学生を送ることを余儀なくされる状況が続いた。特に1960年代から1970年代にかけて中東から欧米への移動が活発であった［Sardar 1982: 11–14］。

一方、東南アジアでは、植民地の支配側が主体的となり、近代的な大学教育をもたらしたとみることができる。インドネシアでは、1851年に植民地の政府によって現在のインドネシア大学の母体である医学学校が設立された。またマレーシアでは、1905年に植民地政権や華僑によって医学学校が設立されたのが、現在のマラヤ大学の前身となっている[2)]。しかし、これらの地域では独立するまで大学も植民地政権などによって支配されていたため、本格的に現代科学が広く受容され、イスラームと直面していくのは独立以後、すなわち20世紀中葉ごろであると考えることができる［Martin, Woodward and Atmaja 1997: 146］。さらに、「科学のイスラーム化」にかかわる議論が活発

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）http://www.cu.edu.eg/, http://www.damascusuniversity.edu.sy/en/index.php, http://www.aucegypt.edu/Pages/default.aspx, http://www.aub.edu.lb/main/Pages/index.aspx, http://www.higher-edu.gov.lb/arabic/privuniv/personal_univ.html（2010年8月27日閲覧）

2）http://www.um.edu.my/, http://www.ui.ac.id/（2010年8月27日閲覧）

化したのは中東で高まったイスラーム運動の影響を受け始めた1970年代であると考えられる。

また、1960年代、1970年代中東からの学生や研究者の留学の増加に伴い、欧米への頭脳流出という現象が発生していった［Sardar 1982: 11; IIIT 1989 73–74］。その結果、アメリカではMuslim Student Association（MSA）などが設立されるなど、現代科学を修めたムスリムが集まりはじめた［Smith 1999: 168–169］。このような局面もイスラームが現代科学に邂逅した局面の一つと考えることができ、「科学のイスラーム化」といった議論が生まれてくる大きな契機の一つとなっているということができる。

3. 中東における「科学のイスラーム化」論の展開

次に、以上で述べたような現代科学の受容の背景を持つ各地域において「科学のイスラーム化」の議論が展開していったのかを概観する。

3.1. 中東における「科学のイスラーム化」にかかわる思想の展開

中東における「科学のイスラーム化」は、20世紀初頭からのエジプトを中心とした世俗派知識人の活動と伝統派ウラマーとの対立から議論が形成されていった。この中東における議論は後に他の地域における「科学のイスラーム化」の議論に影響を与えていったものと考えることができる。また、中東において展開されてきた議論は、伝統派と結びつきの強い政府などによってしばしば弾圧されたこともあり、組織での大きな活動によって展開されてきてはいないとみられる。このように組織的な活動性が薄いことから、議論は個人による言説によって展開されてきたと考えられる。

1920年代ごろから、近代的な教育によって生み出された新たなムスリム知識人層の出現により、近代的な知がイスラームにおける伝統的な知に対する存在として認識されるようになってきた。ターハー・フサイン（1973没）は、アズハル大学の出身である一方でその教育に苦痛を感じ、近代西洋的な教育に魅力を見出し傾倒していった人物である［Abaza 2002: 61］。彼の西洋近代に寄った言説は伝統派によって痛烈に批判されることとなった。つづいて、アフマド･アミーン（1954没）は、近代科学と宗教は論理の運用によって折り合いをつけるべきで、ウラマーによる伝統的な解釈と取って代わられるべきであると主張した［Abaza 2002: 163］。彼らは、世俗的な教育のバックグラウンドがあり、かつ伝統的なウラマー層に敵意を持っていたものの、イスラームを捨て去ってしまおうというような立場をとっていたわけではなかった。それは彼らの言説が広くムスリムに受け入れられることを目指したためであると考えられる。1928年にムスリム同胞団が設立されたこともあり、とくに1930年代と1940年代では、彼らのような世俗派と考えられる人物の言説にもイスラームをバックグラウンドにした議論が必要とされた環境であったということがいえる。このような背景の中で同胞団のようなイスラーム改革派に迎合せずに自身の立場を示すために、世俗派の中から､ムウタズィラ思想を復興させることで近代性とイスラームを擦り合わせていこうとする考え、いわゆるネオ・ムウタズィラ的思想が現れてきたと考えられている［Hildebrandt 2007: 211–212］。

1979年にイラン革命が起こると、さらに議論は展開していく。これまで社会主義思想に傾倒していたハサン・ハナフィーは、イラン革命の直後の1980年に「左派イスラーム（left Islam）」を提唱した。彼はイラン革命によって、近代国家の伝統的なイスラーム法学者による支配を実現してしまったことで、世俗主義的な思想の浸透はこれ以上期待できないと考えた。そこで、イランの革命政権で担っている法学者の立場、すなわちイスラーム法に基づく統治する立場（*faqīh*）が、世俗的な教育を受けてきた知識人に取って代わられるような形を目指すべきであると彼は主張した。こ

のようなイスラームにかんする判断を世俗の知識人が可能なものとしていこうという思想は、アメリカでIIITを創設したファールーキーも共有しているものと考えられている［Abaza 2002: 63］。こうして中東で展開されてきた議論が、1980年代以降にさまざまな地域で本格的に展開されていった「科学のイスラーム化」の動きのきっかけを作ったと考えられる。

一方、その後も中東では依然として世俗派の知識人と政府のバックグラウンドを受けた伝統的知識人の対立が続いており、世俗派の知識人の活動や「科学のイスラーム化」にかかわる活動は大きな展開を妨げられている。1993年には、ハサン・ハナフィーの弟子であるアブー・ザイドが世俗主義的な思想を持ちイスラームを離脱しているとし、裁判にかけられた［Hashim 1996］。またIIITのカイロ・オフィスにかんしても、1995年にメンバーが立て続けに逮捕されるという事件が起こった［Abaza 2002: 143］。

3.2. 近年の湾岸地域における科学技術事情と「科学のイスラーム化」のギャップ

湾岸地域は「科学のイスラーム化」にかんする議論が活発ではない一方で、近年科学技術の発展に力が注がれている。湾岸地域における科学技術研究や教育の推進は「科学のイスラーム化」論とはほとんど関わらない形でおこなわれているとみられる。実際近年の湾岸地域の科学技術は、欧米の大学や研究施設と提携や誘致する形で進められている［Mazawi 2008: 60–62; Foley 2010: 147］。直近の動きでは、サウディアラビアで2009年にアブドゥッラー国王科学技術大学が創立された。このアブドゥッラー国王科学技術大学は、マサチューセッツ工科大学をモデルとして作られたとされている［Foley 2010: 147］。またアブダビでも、同年マスダル科学技術大学を開校した。マスダル科学技術大学は、技術、教育面でマサチューセッツ工科大学大学と提携・協力関係を築いている［Reiche 2010: 380］。

ここで、マスダル科学技術大学にかんして詳しく参照してみる。マスダルとは、アブダビが2006年から開始したプログラムで建設された都市である。マスダルは代替エネルギーの使用によって炭素増加に影響を与えない都市として建設されている。2016年に都市は完成される予定である。このプログラムの一環として設立されたマスダル科学技術大学であるが、IT、材料工学、水環境、工学マネジメントなどにかんして教育・研究がおこなわれている［Reiche 2010: 379］。

ここで、アブダビのマスダル建設の目的はつぎの3点とされている。第1に、石油に依存しない形で経済を維持できるようポスト石油時代に備えることである。現在でもアブダビは収入の多くを石油から得ているため、将来石油が尽きていくあるいは需要が減っていくことに対して先手を打っていこうとしているといえる［Reiche 2010］。第2に収入だけではなく、石油によって獲得していたエネルギーにかんする国際的リーダーシップを、ポスト石油時代でも再生可能エネルギー開発を推進することによって保っていこうというものである。これも代替エネルギー開発の国際的需要が高まっている中で、いち早く流れを自身のほうへと引き寄せようという意図に基づいている。また将来的には、技術をとりいれるだけではなく、技術を輸出していく立場となることを目指すことで、さらに国際的なリーダーシップを強めていこうとしている［Reiche 2010］。第3に、マスダルの都市モデル自体を、将来の都市モデルとして世界的に発信していきたいというものである［Reiche 2010］。グローバル規模で自身のアイディアや価値観を広めていきたいと考えられる。実際、CNNの衛星テレビ放送のなかではマスダルがスポンサーとなっている環境番組があり、国際的なマスダルの認知度の向上を意図しているものであると考えられる[3)]。

3）　CNN Earth’s Frontiers（2009年3月5日閲覧）

以上のようなアブダビの目的意識から判断する限り、マスダルのプロジェクトと「科学のイスラーム化」の議論との関係はまだ明らかにされていないといえる。しかしアブダビのマスダル・プロジェクトにかんする中心的なアクターは、アラブ人でありムスリムに違いないため、全く関係のないことであるとも言い切れるわけではない。また、前述したマスダルのプロジェクトでは国際性が強調されていることから、さまざまな宗教や文化とかかわらざるを得ない状況であるといえる。そのため、イスラームとしてこのような事業や科学技術に対してどのような見方をしているかということは、一層注目されるべき話題であると考えられる。したがって今後、こういった事業において「科学のイスラーム化」の議論というものがどのようにかかわり、捉えられているかを明らかにしていかなければならないと考える。

4. 欧米における「科学のイスラーム化」論の展開

4.1. アメリカ合衆国

アメリカにおける「科学のイスラーム化」の活動は、国内のイスラーム組織の展開にともなって変遷していったものであると考えられる。ここでは、アメリカにおける全国規模でのイスラーム団体の発展を追いながら「科学のイスラーム化」論の展開を考察していくことにする。

全国規模のイスラーム団体は、第二次世界大戦後になって現れてきた。まず 1952 年にアブドゥッラー・イグラムを中心として、Federation of Islamic Organization（FIA）が設立された。この団体は、アラブ系移民を中心とした団体でサウディアラビアからの資金援助を受けていることから見えるように、民族的アイデンティティを主張する性格の強いものであった。FIA は近年も活動を継続している［Smith 1999: 167–169］。

一方で 1960 年代になると、ムスリム同胞団やジャマーテ・イスラーミーといったイスラーム復興運動の思想を掲げた団体の影響力が拡大していった。最も代表的な団体は 1963 年に設立された Muslim Student Association（MSA）である。MSA の下にはさまざまな専門組織が設立され、それぞれの社会的側面における「イスラーム化」が目指された。たとえば、金融・投資関係では The North American Islamic Trust（NAIT）、教育関連では The Islamic Teaching Center（ICS）などがあげられる。また、専門職の団体も作られた。医学関係の Islamic Medical Association（IMA）、社会科学関係の The American Muslim Social Scientists（AMSS）、ビジネス関連の Muslim Businessmen and Professionals（AMBP）、理学・工学関連の American Muslim Scientist and Engineers（AMSE）等が挙げられる。AMSS は、*The American Journal of Islamic Social Science*（*AJISS*）という雑誌を発行している団体である［Smith 1999: 169–170］。さらに、International Institute of Islamic Thought（IIIT）の設立者であるファールーキーは MSA で活動をおこなっていたメンバーの一人である。また 1971 年に設立された AMSS の初代代表であり、1976 年まで務めている。また彼は、シカゴにある American Islam College（AIC）の設立にかかわり、そのカリキュラムの作成にも尽力した［Stenberg 1996: 152–154］。

1981 年には、MSA の活動計画を実行、運営していくために Islamic Society of North America（ISNA）が設立された。ISNA の活動は、黒人のムスリムコミュニティーとの関係構築に苦労しながらも、アメリカにおけるイスラームのあらゆる側面に関わるような広い活動をおこなっていた。ISNA は *Islamic Horizons*, *American Journal of Islamic Studies*, *Al-Ittihad* といった雑誌を発行しいている［Smith 1999: 170–171］。ISNA は、サウディアラビアからの援助や、ムスリム同胞団やジャマーテ・イスラーミーといった組織と直接の協力関係があったといわれている［Stenberg 1996: 155］。また、同時期

にアメリカにおいて影響力を持っていた組織としてIslamic Circle of North America（ICNA）があげられる。ICNAは、1968年に設立された。傘下組織の数では、ISNAの規模を下回っているものの、カナダや東海岸を中心に大きく活動をおこなっていた。ISNAと活動内容が共通していることから対立が存在しつつも、協力関係を築きながら活動をおこなっていたとみられている。またICNAは*The Message*という雑誌を発行している。ICNAの活動傾向としては、ISNAが社会政治的な側面を強調するのに対し、ICNAがアメリカのムスリムの内面を啓発することに重点を置いていた［Smith 1999: 171］。

1990年代には、組織の多様化していく様子が覗える。1992年にはISNAのメンバーがMuslim American Societyを設立している[4)]。また、アカデミック関連の側面においても、Forum for Islamic Work, the Islamic Research Foundation, the Islamic Propagation Center, the Muslim Thinker Forum, North American Association of Muslim Professionals and Scholars（NAAMPS）といった数々の組織が設立されている［Khan 1999］。

アメリカにおけるイスラーム組織の変遷は以上のようであるが、「科学のイスラーム化」あるいは「知のイスラーム化」の議論や活動においてこれらはどのような関わりがあったのであろうか。［Khan 1999］では、近年のアメリカにおける「科学のイスラーム化」の活動が活発でなくなってきていると論じながら、その活動の変容にかんして説明がなされている。ハーンによると、1986年にファールーキーが暗殺されたことを機に、特に1990年代初頭に入ってからは、AMSSやIIITを中心に活発におこなわれていた「科学のイスラーム化」の活動は一気にその進展の速度が鈍化したという［Khan 1999: 62–63］。その後、ISNAやICNAといった大きな組織が「科学のイスラーム化」を掲げた活動を継承していく動きが起こった。しかしながらそれらは、直接「科学のイスラーム化」の動きを促進させるような動きではなく、単に聴衆を喜ばせるような講演会を行うようなパフォーマンスに過ぎないものとなっていると指摘されている。さらに、前述したように1990年代に組織が多様化していったことにかんしてもAMSSやIIITの活動の低迷が原因であるといわれている［Khan 1999: 63］。

以上をまとめると、アメリカにおける「科学のイスラーム化」の活動はMSAから発展したAMSSやIIITの設立以来大きく進展していった。しかしながらファールーキーの死を契機に、1990年代以降活動は失速していった。それに伴い議論が形骸化したり、まとまりのない多様化が発生したりしているというのが現状となっている。AMSSの発行する*AJISS*では、「科学のイスラーム化」の活動が完全に衰退してしまわずに、活動が再び活発になることを望み、質の高い議論を継続しておこなっているという［Khan 1999: 64］。

4.2. ヨーロッパ

ヨーロッパにおける「知のイスラーム化」ないしは「科学のイスラーム化」の動きは、アメリカのものとは対照的な特徴をみることができる。ヨーロッパの「科学のイスラーム化」の議論は、大きな組織の展開とともに進んでいったわけではなく、個人や小さなグループの規模で議論がなされていったと考えられる。

これは、ヨーロッパとアメリカの移民の性質やそれに伴うイスラーム組織の性質の相違にあると考えることができる。ヨーロッパのムスリムは、各国によって移民の出身地域の層が大きく異なり、それぞれの地域で異なったムスリムの多数派が組織、コミュニティーを形成している。たとえば、

4）　http://www.masnet.org/（2010年5月20日閲覧）

イギリスではインド、パキスタンをはじめとする南アジア出身のムスリム移民が大きな割合を占めている。フランスでは、アルジェリアなどマグリブの出身者が多い［AlSayyad 2002: 33; Vertovec and Peach 1997: 16–19］。また、ドイツでは、トルコ出身者が多いこともよく知られている［Vertovec and Peach 1997: 19］。このようにヨーロッパの各国では特定の地域の出身者が多数を占め、彼らを中心に組織が展開していったため、その出身地域の伝統やそこで広まっているイデオロギーがそのまま適用されていると考えられる。たとえば、イギリスでは、南アジア出身者が多数であることから、ジャマーテ・イスラーミー関係の組織が多くみられる。またフランスでは、マグリブ出身者が多数であることから、ムスリム同胞団や、チュニジアやアルジェリアのイスラーム組織の関係が大きい［Kepel 1997: 85, 110, 154］。

一方アメリカでは、移民が多様な地域から訪れたため、異なったムスリムコミュニティーが交わる機会が多かったと考えられる。また、早い段階から黒人ムスリムのコミュニティーも存在していた。このような条件から考えると、アメリカでは特定の組織やイデオロギーが支配的な状態にはならずに、さまざまなバックグラウンドを持ったムスリムが共存を探っていく環境にあったといえる。実際、ISNA もあらゆるムスリムを受け入れる体勢をとっていた。また、黒人ムスリムの組織もムスリム移民などの他のコミュニティーとの融和、共存を求める態度をとっている。

以上のようなことから、ヨーロッパのイスラーム組織はムスリム移民が移民先においても出身した地域の思想や習慣を継続できるために形成されたものであると考えることができる。したがって、ヨーロッパでは地域の独自的な価値を創出する環境が、アメリカと比較すると、薄いと考えられる。結果として、ヨーロッパにおける「科学のイスラーム化」の動きは組織の方針の一環として創出されたわけではなく、小規模のグループ、ないしは個人レベルで議論がされてきたものであると考えることができる。実際、イギリスを拠点にして活動するジアウッディン・サルダルは、イギリスにおける最も代表的な「科学のイスラーム化」論者であるが、組織で活動していたわけではなく、著述家や批評家として個人での活動が目立っている[5)]。彼を中心としたイジュマーリー学派も、大きな組織ではなく、共通の興味や目的をもった研究者があつまった程度の小規模の集団である［Sardar 1989］。オランダで研究を行う、アブー・ザイドもまた、エジプトにおける裁判の判決が原因でエジプトから逃れてきたため、個人的な活動が中心であると考えられる［Hildebrandt 2007］。

5. 東南アジアにおける「科学のイスラーム化」論の展開

ここでは、東南アジアにおける「科学のイスラーム化」の動きを考察していく。とくに東南アジアの中でも、イスラームにかんする議論で中心的なマレーシアとインドネシアにおける「科学のイスラーム化」の動きを見ていく。マレーシアにおける「科学のイスラーム化」に関わる議論の特徴としては、政治や政策の一環として高まっていったということがいえる。一方、インドネシアにおける「科学のイスラーム化」関連の議論は、イスラーム運動にかかわる組織の変遷に伴っていると考えられる。

5.1. マレーシア

マレーシアにおける「科学のイスラーム化」の議論は、独立以来政権与党である統一マレー国民組織（UMNO）の政策とつねに大きな結びつきがある。いわゆる「オフィシャル・イスラーム」の領域で議論が進んでいったということができる［Abaza 2002: 70］。UMNO は「革新的イスラーム」

5） http://www.ziauddinsardar.com/（2010 年 5 月 20 日閲覧）

という姿勢をもって、近代的な国家の発展を目指した政策を掲げている［Chong 2006］。

1970年代前半から、中東におけるイスラーム復興運動に触発された運動であるダクワ運動が活発になった。ダクワ運動は、1971年にアンワル・イブラヒムが創設したマレーシア・イスラーム青年運動（ABIM）を中心にして拡大していった。この運動の拡大に伴い、伝統的なイスラームを強調する全マレーシア・イスラーム党（PAS）の勢力も拡大していった［佐藤 1996: 200–204］。

1970年代後半になってダクワ運動は、中東への留学生の増加や、中東戦争やイラン革命などの政治情勢が影響したため、当初はマレー民族の発展が目的の中心であったのが、中東でのイスラーム主義のイデオロギーが運動の中心へとすりかわっていった。こうしてダクワ運動の活動家の中でも目的の相違のために政権側に接近していく人が現れるようになった。このような動きと、1981年アンワル・イブラヒムがUMNOに加入したことをきっかけにして、UMNOはダクワ運動を取り込み従来よりもイスラームを土台にした国家の発展を目指すようになった［Chong 2006: 30–31; 佐藤 1996: 204–205］。こうして1980年代以降、マハティール政権下のUMNOの政策において「知のイスラーム化」や、「科学のイスラーム化」の動きが盛り込まれるようになっていった。

ABIMのメンバーであったアンワルが、以前からIIITのメンバーと深い関わりがあったこともあり、1980年代以降のUMNOによる「科学のイスラーム化」に関わる政策は、IIITと大きく関わりながら進んでいった。1983年のクアラルンプールの国際イスラーム大学（IIUM）が創設される際にもファールーキーなどの人物をはじめとしてIIITが、そのプロジェクトの中心を担っていた［Abaza 2002: 80］。また、1984年にはクアラルンプールでIIITによる第3回知のイスラーム化国際会議[6]がおこなわれた。そのなかではマハティール首相が演説をおこない、IIITの方針に協力していくということを明言した。さらに、アンワルが1986年に教育相に就任すると、1988年にはIIITの創設者の一人であるアブドゥルハミード・アブー・スライマーンがIIUMの総長として就任した［Furlow 2009: 210–211］。アンワルは「科学のイスラーム化」の動きにかんしてIIITとの連携を深めていく一方で、IIIT以外の「科学のイスラーム化」の活動の促進もおこなっていた。アンワルは1987年にはサイイド・ナギブ・アル＝アッタスを所長としてInternational Institute of Islamic Thought and Civilization（ISTAC）をIIUMの附属施設という形で創設した［Steinberg 1996: 161; Furlow 2009: 212, 220］。ISTACはマレーシアにおける「科学のイスラーム化」の活動の一環とされているが、IIITとは一線を画した独自路線をとっている。実際アル＝アッタスもIIITやIIUMの活動と関連性がないということを明言している。IIITが社会運動的な働きかけが強い一方で、ISTACは思想中心の抽象的な議論を中心におこなう傾向があるという分析もみられる［Abaza 2002: 92; Furlow 2009］。

1990年代になると新経済政策（NEP）が終了し、新たな政策「ヴィション2020」が1991年に打ち出され、いっそうの科学技術の発展に基づく経済発展を目指していった［Chong 2006］。このような政策の中で「科学のイスラーム化」の動きはさらに活発になっていった。それに応じてIIUMはイスラーム的知と近代西洋の世俗的な知の体系を再構築し、イスラーム国家としての発展に貢献できる人材を育成するといったような役割において重要性を増していった。IIITにかんしても、1993年から1994年までの間ではIIITの本部をアメリカからクアラルンプールに移動することを検討していたといわれている［Steinberg 1996: 158; Furlow2009: 219］。

2000年代も、2003年にマハティールが首相を引退しアブドゥッラー・バダウィが首相となった

6）3rd International Conference of Islamization of Knowledge, Kuala Lumpur, Malaysia, 24-31 July 1984. マレーシア文化・青年・スポーツ省と共同開催。当時アンワルが同省大臣であった［Furlow 2009: 210］。

が、基本的に政策は継続しているとみられる。アブドゥッラー政権の下では 2004 年の総選挙以来、「イスラーム文明」（マレー語 : *Islam Hadhari*）というキーワードに基づいて政策が立てられている。その政策の一環として、Institute of Islam Hadhari が 2006 年に創設された。この組織もまた「科学のイスラーム化」の議論をおこない、それに基づいた教育活動を進めている組織であるが、ISTAC や、IIIT など IIUM に関連した組織とは直接的には関係のない組織であるとみられる。

このように、時系列にしたがってマレーシアにおける「科学のイスラーム化」の展開をみてきた。ここで、現在のマレーシアにおける「科学のイスラーム化」の動向はどのようであるか考察していく。現在、独立している大きな動きは 3 つ存在しているとみられる。まず、IIIT 関連の動き、つぎに ISTAC、最後に Institute of Islam Hadhari である。はじめに IIIT はアンワルが政権から排除された 1998 年ごろ、クアラルンプールのオフィスは廃止となった。原因は、IIIT との関係が最も親密であったアンワルが政権から追いやられたと噂されているが、IIUM が IIIT の協力なしに「科学のイスラーム化」を推し進めていけるようになったからだともいわれており、はっきりしていない［Furlow 2009: 219–220］。ISTAC にかんしては、2002 年に IIUM から独立していた地位を失い、IIUM の一つの学部として取り込まれている[7]。また、IIIT と ISTAC の現在に至るまでの活動を、「科学のイスラーム化」の普及という面にかんして、うまく機能していないという分析もある［Furlow 2009］。このような現状を踏まえて、新しい組織である Institute of Islam Hadhari が IIIT や ISTAC とどのように異なり、どのような将来性を持っているかということを分析・考察をおこなわなければならないと考えられる。これについては筆者の博士予備論文で詳しく議論をおこなう予定である。

5.2. インドネシア

インドネシアでは二つの代表的なイスラーム組織を中心にして議論が動いてきたといえる。一つ目にムハンマディヤである。ムハンマディヤは 1912 年に創設されたイスラーム改革派の組織である。現在は 2000 万人の支持者を持っている。もう一つの代表的な組織として、ナフドゥラトゥル・ウラマー（NU）が挙げられる。NU は 1926 年にイスラーム伝統派、あるいは保守派の組織として創設された。現在、地方を中心に 3000 万の支持者を持っている。双方ともに、全国各地に多様な教育施設を設置して教育活動を盛んにおこなっている［Mak 2002: 238–239］。また設立時点で対立色が強く見えていたが、現在では NU も近代化に対して寛容な態度をとるなど、双方の対立関係が見えにくくなっている［Mak 2002: 237; Martin, Woodward and Atmaja 1997: 146］。

インドネシアにおける「科学のイスラーム化」に関わる議論は、ムハンマディヤというイスラーム改革派の組織を中心に構築され、近年では特に「リベラル・イスラーム」を掲げた組織や人物によって議論が進められている。インドネシアにおいてこのような議論が始まったのは、20 世紀初頭にオランダによる西洋式の世俗的な教育と伝統的なイスラーム教育の隔絶がもたらした経済的な格差のためであった。また独立後の時代になると、インドネシアの国家としての近代的発展を探るために議論がなされた［Martin, Woodward and Atmaja 1997: 140–141］。「科学のイスラーム化」の議論は、このような近代的知に対する問題意識を抱えている背景から、イスラームにおける理性をいかに捉えるかという近代化論として議論されていた。こういった近代と理性にかんする議論の中ではムウタズィラ学派への言及もあらわれている。

ここで、「科学のイスラーム化」に関係する議論の展開を追っていく。まず、ムハンマディヤによって始められた近代性や理性にかんする議論は、中東でイスラーム復興運動の基盤となった、アフガー

7） [Furlow 2009: 224], http://www.iiu.edu.my/（2010 年 5 月 20 日閲覧）。

ニーやアブドゥの影響を受けながら展開された。したがってムハンマディヤの議論は、理性を重んじるものではあったが、神学的にはアシュアリー学派の教説からは逸脱しないものであった。つまり、神や信仰にかんしてはクルアーンとハディースからのみ理解すべきで、理性の運用は現世に存在する事物に限って認めるというものであった［Martin, Woodward and Atmaja 1997 1997: 142-143］。この点にかんして、NU などの保守層と見解には相違がなかったといえる。

1970 年代になると、より現実的にインドネシアの発展を見据えた議論が、ヌルホリス・マジドを中心にしておこなわれるようになった。彼は「発展の神学」や「宗教思想革新運動」と銘打って、近代的知をクルアーンとハディースの解釈によって取り入れようしているこれまでの近代化論者を批判した。そして、さらに根本的なところから理性を用いることで国の発展に直結させるべきだと訴え、「リベラル・イスラーム」と呼ばれるような議論を展開していくようになった［Martin, Woodward and Atmaja 1997: 148–149; Noorhaidi 2005: 316–317］。

さらに、この「リベラル・イスラーム」の流れの中から、ムウタズィラ神学を持ち出した議論がハールーン・ナスティオンを中心にしておこなわれるようになった。たとえ「リベラル・イスラーム」であったとしてもほとんどの知識人がスンナ派的伝統、すなわちアシュアリー神学を守っていたという環境のなかで、ナスティオンはムウタズィラ思想を用いて議論を展開していった。「ネオ・ムウタズィラ」は、保守派が「リベラル・イスラーム」を揶揄する文句であったにもかかわらず、彼は自身でそのように名乗って議論をおこなっている［Martin, Woodward and Atmaja 1997: 149］。ちなみに、マジドやナスティオンはともに、「リベラル・イスラーム」の中心的な組織である State Institute for Islamic Studies（IAIN）の代表的なメンバーである［Martin, Woodward and Atmaja 1997: 162; Noorhaidi 2005: 317］。

近年の「リベラル・イスラーム」は多様な人々へ呼びかけていく動きも見せている。2001 年に、若手の思想家の間でリベラル・イスラーム・ネットワーク（JIL）が結成された。JIL のメンバーはムハンマディヤや、ナフダルトゥル・ウラマーなどのメンバーも含まれており、多様なバックグラウンド持つ人が所属している。JIL は新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどさまざまなメディアを用いて自らの言説を広めるような活動をおこなっている［Noorhaidi 2005: 316–317］。

6. 国際的ネットワークを通じた「科学のイスラーム化」論の展開

これまで各地域の「科学のイスラーム化」の議論をみてきた。そこから明らかになったことは、各地域で固有の「科学のイスラーム化」があるだけではなく、各地域間のかかわりの中で発展したということである。たとえば、まず 20 世紀初頭に中東で始まった議論は、中頃にはアメリカにおいて独自の発展を遂げた。その後、アメリカで構築された思想はマレーシアの国内のイスラーム政策と合流したという流れになっているとみることができる。このように、「科学のイスラーム化」の議論は国際的な視点で見て一つのまとまりをなした形でも存在しており、各地域を個別にみるだけでは見えてこない側面も有している。さらに、「科学のイスラーム化」の議論には、国際的な視点に立って初めて見えてくる独自性が存在している。つまり、国際的に共有されている議論は各地域の最大公約数もしくは、絶対的な規範であると見られがちであるが、それとは異なった独自の形がそこには存在しているということである。そのような独自性の一例として、国際的に展開される「科学のイスラーム化」の議論は基本的に英語を通しておこなわれるということが挙げられる［Stenberg 2009: 110］。英語によるイスラームの議論は、各地域内で広く共有されているとは限らず、またイスラーム世界全体としても「正しいイスラーム」とみられているわけではないものである。

つぎに本節では、一つの国際的な流れとして「科学のイスラーム化」論がどのように展開してきたのかということを、前節を振り返りつつ考察していきたい。また現在、国際的なイスラームとしてどのような流れがあるのかも確認していきたい。

はじめに、19 世紀末に活躍したムハンマド・アブドゥをはじめとするイスラーム改革派の思想がひとつ「知のイスラーム化」の議論が展開する起点となっているといえる。ムハンマド･アブドゥの改革的な思想は、中東の世俗派の知識人に影響を与えただけではなく、インドネシアにも影響を与えていった。この影響で起こったのがムハンマディヤである。インドネシアにおける「科学のイスラーム化」議論はムハンマディヤを軸にして展開していった。

20 世紀中葉になると、中東や南アジアなどのイスラーム復興運動の高まりが欧米へも飛び火していった。このような影響の中で、特にアメリカでは MSA などが設立され、アメリカ独自の議論が展開されていったと考えられる。ファールーキーの議論などが、中東における世俗派の議論とも共通点がみられることからも、単なる復興運動の影響ではなく独自性を持っていることがわかる［Abaza 2002: 63］。

その後、ファールーキーのパキスタンやマレーシアでの活動や、アメリカの IIIT の貢献による国際イスラーム大学の創設などを通してパキスタンやマレーシアでも「科学のイスラーム化」の議論が高まっていったといえる。また、ジアウッディン･サルダルもイギリスで活躍しているが、マレーシアやサウディアラビアなどでも活動していた［Abaza 2002: 29, 79, 82; Stenberg 1996: 41］。さらに IIIT はアジア、欧米、中東、アフリカの世界各地に多くの支部を構え「科学のイスラーム化」を国際ネットワークで展開をしている[8)]。

以上、「科学のイスラーム化」議論の国際的展開を概観してきたが、この議論は運動や思想が国際的に影響を与えながら発展してきただけではなく、実際の人的ネットワークの密な繋がりによって発展している。たとえば、マレーシアのアンワル・イブラヒムを軸に人脈を考えてみる。アンワルは ABIM で活動していた頃から、アメリカのファールーキーがマレーシアをたびたび訪れるなどし、親交が深かった。アンワルが政権側に移った後も IIIT との結びつきが強かったように、関係は続いていたと考えられる［Abaza 2002］。さらに、イギリスのジアウッディン・サルダルは、アンワルのアドバイザー役を担っていたといわれる。サルダルとアンワルは双方で行き来をして頻繁に意見を交わしていたようである［Abaza 2002: 29］。また、イラン出身でアメリカのサイイド・ホセイン・ナスルもマレーシアにおいてアドバイザーを担っていた［Stenberg 2009］。

前述したファールーキーや IIIT のメンバー、サルダル、ホセイン・ナスルも互いに会議で議論を交わすなどを通して繋がりがみられる[9)]。また、各人物もそれぞれ世界中に人脈を持っている。ファールーキーはマレーシアだけでなく、エジプト、シンガポール、パキスタンにも人脈があったといわれている［Abaza 2002］。サルダルは、インドで「科学のイスラーム化」を論じるアリーガル学派と議論をおこなっている［Sardar 1989］。また、ホセイン・ナスルもスーフィズム思想研究関連で広く人脈を持っているとみられる。

以上、さまざまな地域で進んでいる議論が国際的な議論の流れと関わりながら発展していっているということが明らかになった。今後の研究では、それぞれの論者や組織が、国際的なネットワー

8） http://www.iiit.org/（2010 年 4 月 28 日閲覧）

9） [Abaza 2002], カイロ、Center for Epistemological Studies にて Dr. Malkawi 氏への聞き取り調査による（2010 年 2 月 25 日実施）

クにどのように参与し、また自身の議論を発展させ活動していっているかということを具体的な事例として研究、調査していくことが求められよう。

参照文献

佐藤孝一 1996「マルチ・エスニック国家マレーシアの選択」（小杉泰編）『イスラームに何がおきているか』平凡社 , pp. 197–212.

Abaza, Mona. 2002. *Debates on Islam and knowledge in Malaysia and Egypt: shifting worlds*. London: Curzon.

AlSayyad, Nezar. 2002. “Muslim Europe or Euro-Islam: On the Discources of Identity and Culture,” in Nezar AlSayyad and Manuel Castells (eds.), *Muslim Europe or Euro-Islam*, Lanham: Lexinton Books, pp. 9–30.

Chong, Terence. 2006. “The Emerging Politics of Islam Hadhari,” in Saw Swee-Hock and K. Kesavapany (eds.), *Malaysia: recent trends and challenges*, Singapole: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 26–46.

Foley Sean. 2010. *The Arab Gulf States: Beyond Oil and Islam*. Boulder, CO: Lynne Rienner Publishers.

Furlow Christopher A. 2009. “Malaysian Modernities: Cultural Politics and the Construction of Muslim Technoscientific Identities,” *Anthropological Quarterly,* 82 (1), pp. 197–228.

Hāshim, Muḥammad. 1996. *Naṣr Ḥāmid Abū Zayd bayna al-takfīr wa-al-tanwīr: ḥiwār shahādāt wathā’iq*. Cairo: Cairo Center for Research, Exercise and Publishing.

Hildebrandt, Thomas H. 2007. *Neo-Mu’tazilismus?: Intention und Kontext im modernen arabischen Umgang mit dem rationalistischen Erbe des Islam*. Leiden: Brill.

IIIT. 1989. *Islamization of Knowledge: General Principles and Work Plan*. Herndon, VA: IIIT.

Kepel, Gilles. 1997. *Allah in the West: Islamic Movements in America and Europe*. Cambridge: Polity Press.

Khan, Shujaat A. 1999. “A Critical Review of Islamization of Knowledge in the American Perspective,” in Amber Haque (ed.), *Muslims and Islamization in North America: problems and prospects*, Beltsville: amana publications, pp. 49–68.

Mak, Lau-Fong. 2002. *Islamization in Southeast Asia*. Taipei: Asia-Pacific Research Program.

Martin, Rechard C. and Mark R. Woodward with Dwi S. Atmaja. 1997. *Defender of Reason in Islam: Mu‘tazilism form Medieval School to Modern School*. Oxford: Oneworld Publications.

Mazawi, André Elias. 2008. “Policy Politics of Higher Education in the Gulf Cooperation,” in Christopher M. Davidson and Peter Mackenzie Smith (eds.), *Higher Education in the Gulf States: Shaping Economies, Politics and Culture*, London: SAQI, pp. 59–72.

Noorhaidi, Hasan. 2005. “September 11 and Islamic Militancy in Post-New Order Indonesia,” in K. S. Nathan and Mohammad Hasim Kamali (eds.), *Islam in Southeast Asia: Political, Social and Strategic Challenges for the 21st Century*, Singapole: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 301–324.

Reiche, Danyel. 2010. “Renewable Energy Policies in the Gulf countries: A Case Study of the Carbon-neutral ‘Masdar City’ in Abu Dhabi,” *Energy Policy* 38(1), pp. 378–382.

Sardar, Ziauddin. 1982. *Science and Technology in The Middle East*. London and New York: Longman.

———. 1989. *Exploration in Islamic Science*. London and New York: Mansell.

Smith, Jane I. 1999. *Islam in America*. New York: Columbia University Press.

Stenberg, Leif. 1996. *The Islamization of Science: Four Muslim Positions Developing an Islamic Modernity*. Lund: Novapress.

———. 2004. "Islam, Knowledge, and 'the West': The Making of a Global Islam," in Birgit Schaebler and Leif Stenberg (eds.), *Globalization and The Muslim World: Culture, Religion, and Modernity*, Syracuse, NY: Syracuse University Press, pp. 93-112.

Vertovec, Steven and Ceri Peach. 1997. "Introduction: Islam in Europeand the Politics of Religion and Community," in Steven Vertovec and Ceri Peach (eds.), *Islam in Europe: The politics of religion and community*, Hampshire and London: Macmillan Press, pp. 3–47.

Website

American University in Beirut. 2010. http://www.aub.edu.lb/main/Pages/index.aspx（8 月 27 日閲覧）.

American University in Cairo. 2010. http://www.aucegypt.edu/Pages/default.aspx（8 月 27 日閲覧）.

Cairo University. 2010. http://www.cu.edu.eg/（8 月 27 日閲覧）.

Damascus University. 2010. http://www.damascusuniversity.edu.sy/en/index.php（8 月 27 日閲覧）.

Directory of Higher Education. 2010. http://www.higher-edu.gov.lb/arabic/privuniv/personal_univ.html（8 月 27 日閲覧）.

Indonesia University. 2010. http://www.ui.ac.id/（8 月 27 日閲覧）.

International Institute of Islamic Thought. 2010. http://www.iiit.org/（4 月 28 日閲覧）.

International Islamic University in Malaysia. 2010. http://www.iiu.edu.my/（5 月 20 日閲覧）.

Malaya University. 2010. http://www.um.edu.my/（8 月 27 日閲覧）.

Muslim American Society. 2010. http://www.masnet.org/（5 月 20 日閲覧）.

Sardar, Ziauddin. 2010. http://www.ziauddinsardar.com/index.htm（5 月 20 日閲覧）.